

## オンラインによる子ども・子育て支援の可能性

—コロナ禍2年間における活動の実践報告—

瀬々倉玉奈  
(児童学科)

清水 文  
(びっばらん外部講師)

2年間にわたるコロナ禍においてオンラインによる子ども・子育て支援を実践し、並行して保育学生を支援者として養成してきた。2020年度及び2021年度に実施したプログラムの概要を振り返りICTを駆使したハイブリッド型と、従来からの来室・対面型による諸活動とを比較検討した。オンラインによる活動では、対象年齢児以外のきょうだい、父親の参加、遠方在住の親子、日本語が話せない親子、聞こえに不自由があり字幕が必要な親子など多様な親子に保育学生が関わるのが可能となった。また、遠方に住む祖父母と乳幼児期の親子が再会する場にもなった。特に、家族毎の個別対応プログラムである「びっばらんシリーズ」ではオーダーメイドの遊びを提供できた。

キーワード：ICT, ハイブリッド, 双方向, 多様性, 字幕

### 1. コロナ禍における子ども・子育て支援

2019年度末から始まった新型コロナウイルス感染症(covid-19)拡大の影響(以下、「コロナ禍」と略す。)は、2020年度、2021年度を経てもなお収束の様子が見られない。この間、緊急事態宣言の発令等によって、京都女子大学親子支援ひろば びっばらん(以下、「びっばらん」と略す。)が支援対象としている乳幼児期の親子も大きな影響を受けている。親子が公的機関とつながる契機にもなる乳幼児健診が中止や延期され、日々、保育者や友達と交流してケアや教育を受けることのできる保育園(所)や幼稚園が休園、親子が気軽に集い遊べる児童館などの閉館や利用人数・時間の制限、諸行事の中止や延期など、親子が健やかに暮らすことが難しい状態が続いている。閉塞感や育児不安が深刻化する要因を挙げれば枚挙にいとまがない状況である。

2年間にわたるコロナ禍においてオンラインによる子ども・子育て支援を実践し、並行して保育学生を支援者として養成してきた。2020年度及び2021年度に実施したプログラムの概要を振り返りICTを駆使したハイブリッド型と、従来からの来室・対面型による諸活動とを比較検討する。

### 2. 2020年度の実践活動

2020年度はコロナ禍と共に始まった。従来の来室・対面型のびっばらん活動の実施は断念したものの、活動をとめることなくオンラインによる相互交流型によって2種類のプログラムを合計6回実施し

た。これは、偏に「今だからこそ必要な支援を精一杯やっとう」とする学生たちの熱い思いと、それに応えて下さった親子や関係機関の御協力の賜である。「びっばらん」の諸活動は、準備過程、プログラム当日についても、事前に関係者の同意を得て録画しており、学生の学習に大いに活用している。加えて、参加の親子についてはプライバシー保護のために加工・編集した内容をオンデマンド・コンテンツとして信頼できる関係者を通じて限定公開している。

2020年度のICTを活用したびっばらん活動の準備プロセスについては、Zoom<sup>®</sup>を使用してリアルタイムで交流しながら進めるほか、Microsoft Office365<sup>®</sup>のTeams<sup>®</sup>内に、びっばらん活動に携わる学年を越えた学生の「びっばらんど」Teams<sup>®</sup>を設けて、情報・資料(動画、写真など)の共有を図ったり、チラシや書類を共同作成したり、時間を問わず意見の交換や交流が行えるように環境を整えながら進めた(瀬々倉・清水, 2021)。

びっばらん活動のいずれのプログラムも基本的な流れは、「始まりの会」「メイン活動」「終わりの会」の3つのパートで構成されている。パート毎に準備を進めるほか、チラシづくりや案内動画作成などの広報、字幕・フリップづくり、Zoom<sup>®</sup>のカメラ操作と参加者への説明など、学生と筆者らで試行錯誤しながら進めていった。その過程では、「びっばらん」のキャラクターをペーパーサートにする学生やデジタル絵本にする学生、参加者募集用の案内動画を

作成する学生など、各学生が得意とすることを活かして主体的に考え形を創り上げていく姿が認められた。

字幕やフリップについては、聞こえに不自由のある親子にも楽しんでもらいたいとの思いで行った。コロナ禍で誰もがマスクを着用しているために、口唇の動きを読んでコミュニケーションをとっている聴覚障がいをもつ親子は、非常に困難な状態に陥っているからである。また、オンライン固有の問題として音声通信の不具合があるが、これに対しても字幕やフリップは有効であると考えた。プログラムをスムーズに進めるために、事前に撮影した録画には字幕を付けて使用し、リアルタイムで進める内容についてはフリップを使用した。

以下に、各プログラムの具体的な内容を示す。

(1) 2回の「びっばらんど」

「びっばらんど」は、複数の親子を対象にしており、一斉に親子遊びを提供するプログラムである。2020年度からは上述した新設科目「子ども・子育て支援演習Ⅰ」の一環として単位が認められる2回生が中心になって行い、筆頭筆者の所属ゼミ3・4回生が補助的に関わることとした。

偶然、2回生は全員が同じノートPCを所有している最初の学年であったことから、自宅などのネット接続環境を除いてはICTツールが同一条件で整っていたことも幸いしている。講義時間数は通年で15回であるが熱心な学生たちの要望に応じて筆者らは、講義や会議のない日中、講義期間外の8月・9月についても指導した。時間差で練習するパート毎の学生の都合に合わせて、登校している者と自宅にいる者とを問わずZoom®でつながりながら準備を進めた。パート毎に行う練習は総て録画して「びっばらんど」Teams®に掲載することで情報を共有し、意見交換しながら進めたため、互いにプログラムの流れを理解しながら準備を進めることができた。

講義を受講する学生は10名前後を見込んでいたが28名と想定外に多かったため、①運動遊びと②造形遊びの2グループに分けて「びっばらんど」を2回実施することにした。本来、2回生は夏季休暇中に初めての保育実習に臨む予定であったが、コロナ禍によって次年度の2021年度まで延期となった。このことから、びっばらんど活動は2020年度に子どもや保護者に関わることができる貴重な機会になっている。以下のプログラムの内容を示す写真については、瀬々倉（2021）からの引用である。

①運動遊び「びっばらんど島のぼうけん」

初めてのオンライン双方向交流型のびっばらんど活

動は親子運動遊びを10月17日（土）に行った（図1）。閉塞感を感じていると思われる乳幼児期の親子を如何に物語の世界へと引き込んでいけるかと、それぞれの学生が案をひねり出し、家庭でも身体を動かしながら楽しめるようなプログラムとなっている。

申込者には事前にアニメーションによる招待動画を送って気持ちを盛り上げた（図2・図3）。当日は画面には親子がかぶりついて待っており、学生たちは感激しながらプログラムを進めていった。



図1 びっばらんど島の冒険のチラシ



図2 お手紙

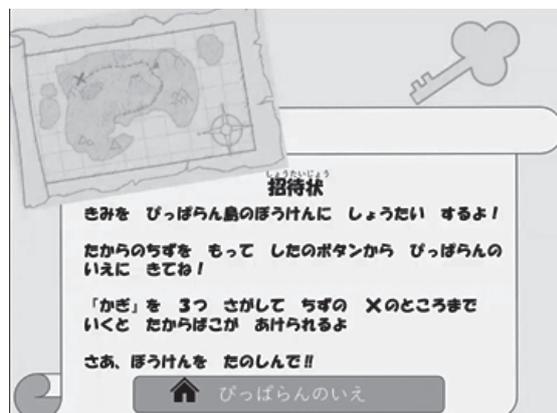


図3 招待状

2人のお姉さんと「びっばらん」キャラクターの「びっばくん」「らんちゃん」が親子を冒険へと誘っていく。最初に地図を指しながら3つの鍵を集めて宝箱を開けることを説明し、びっばらん号に乗船して出発した(図4)。ところが、海上で海賊と出会ってしまう。家庭に用意を依頼していた新聞紙かバスタオルを船に見立てて、「船を乗りこなせ」というバランス・ゲームを画面越しにジャンケンしながら行った(図5)。



図4 びっばらん号



図5 家庭にある新聞やタオル

見本を示すための動画は、コロナ禍のために学生らが自宅で撮影し、Teams®に掲載して意見を求めて何度も撮り直したものである。最終的にはコロナ禍が少し落ち着いた時期に大学で撮り直した動画を使用することができた。びっばらん島に到着すると、険しい道を進む「冒険者の修行」が待っていた。大きく身体を伸ばしたり、ひねったり、ハイハイしたり、泳いだりしながら進んでいくことになる。遂に3本の鍵を手に入れる。宝箱を開けると、修行を終えた表彰状が出てくるのだった(図6)。後日、参加した子ども宛に表彰状を送っている(図7)。

②造形遊び「みんなの1等賞はなあに？」

～世界に1つだけの王冠を作ろう～

2回目の「びっばらんど」は、家庭でも用意しやすい紙皿を使用した王冠作りを11月28日(土)に行った(図8)。



図6 宝箱

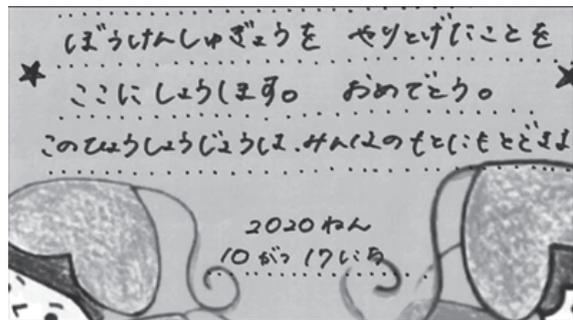


図7 表彰状



図8 「みんなの1等賞はなあに？」のチラシ

外出が制限される中で家庭でも負担なく親子が楽しみながら遊べるには、どのような内容が良いかと話しあった。「日頃のモヤモヤをキラキラに」を合い言葉にしたプログラムである。参加者には事前に立体的な招待カードが作られていく様子を撮影した招待動画を送っている(図9)。デジタル絵本の中で「びっばくん」は、何も得意なことが無いとションボリしている(図10)。

しかし、「らんちゃん」に「泥んこ1等賞」や「ぐっすり眠れる1等賞」など色々な1等賞があると教えてもらい、自分なりの1等賞を思いついていく物語のなかで、紙皿の王冠作りを進めていく(図11・図12)。



図9 招待動画の一コマ



図10 デジタル絵本

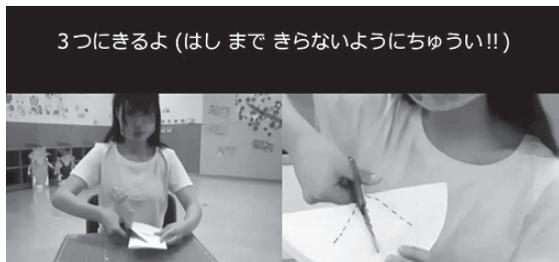


図11 王冠作り (その1)

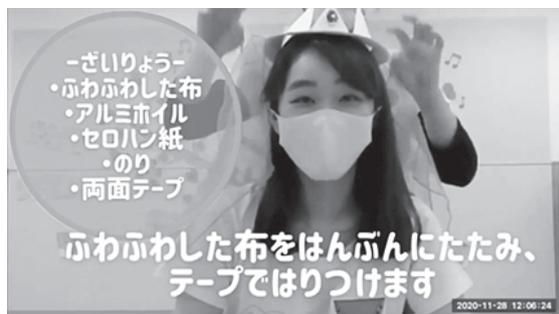


図12 王冠作り (その2)

オンラインによる実施に少し慣れてきたこともあり、「〇〇ちゃんは何の1等賞かな?」と語りかけながら進めることができ、①の運動遊びよりも一段とオンラインならではのプログラムとなった。プログラム終了後のアンケートでは、子どものみならず保護者に対しても、「あなたの1等賞は何ですか」という質問項目を設け、回答に基づいて親子それぞれに表彰状を送っている(図13・図14)。保護者のエンパワメントを意識したことについて「幾つになっても表彰状は嬉しかったです」との御礼のメールが送られてきた。

(2) 「びっばらんシリーズ」

10月31日から11月21日までの土曜日に4週連続で行った「びっばらんシリーズ」は、初回では参加者全員と一つの画面上で一斉に親子のふれ合い遊びを行い、2回目・3回目ではZoom®のブレイクアウト・セッションを利用して家庭毎に個別の遊びを提供している(図15)。

家庭でも用意しやすいペットボトルのマラカス作り、飲料パックを用いたカスタネット作りを行い、最終回では作成した楽器を使って全員でダンスするプログラムである(図16)。

英語のみを使用言語とする親子の参加もあったため、参加者全体で行う活動では、日本語で話して英語のフリップを併用した(図17)。また、個別対応の時間では、英語の堪能な学生1人が4人のきょうだいと保護者に遊びを提供した(図18)。



図15 2020年度「びっばらんシリーズ」のチラシ



図13 子どもの賞状



図14 保護者の賞状



図16 カスタネット作り



図17 英語のフリップ



図18 英語で個別対応

### 3. 2021年度の実践活動

コロナ禍2年目の2021年度には、2回生配当の「子ども・子育て支援演習Ⅰ」に加え、3回生配当の「子ども・子育て支援演習Ⅱ」が開設され、2学年合同で「びっばらんど」を行えるようになった。準備過程では緊急事態宣言下では全員が自宅からのオンライン双方向交流型でつながり、学生が登校可能な時期には個々の希望に合わせて大学での対面と自宅からのオンラインとを併用したハイブリッド型とした。また、イベント本番が近づくと密にならないようにグループ毎に時間をずらして対面で準備を進めた。イベント当日についてもコロナ禍の状況によって同様の措置をとった。同様に行った2020年度に比して自宅からオンラインで参加する学生の比率が高くなった。

また、コロナ禍が2年目となったことから従来の

「びっばらんど」「びっばらんシリーズ」に加えて、新たに約20分間の短時間プログラム「びっばらんミニ」を開始した。これらのオンライン「びっばらん」プログラムを表1に示す。

#### (1) 「びっばらんミニ」

コロナ禍が2年目となったことから「びっばらんど」「びっばらんシリーズ」に加えて、新たに約20分間の短時間プログラム「びっばらんミニ」を開始した(図19)。

この「びっばらんミニ」は、これまでの活動のように何ヶ月もかけて準備をしてから、ようやくイベントを実施するのではなく、早い時期にもう少し気軽に家庭と学生たちがつながることを意図した試みである。幼稚園教育実習や保育園(所)実習の準備ともなるようなプログラムを模索して実施している。また、3回生を主担当とし、2回生はオブザーバーで開始し、3回目は2回生を主担当とする予定であった。

このように、「びっばらんミニ」はA・B・Cの3回を予定していたが、2回目、3回目の「びっば



図19 「びっばらんミニ」のチラシ

表1 2021年度のオンライン「びっばらん」プログラム

プログラム	びっばらんミニ A	びっばらんミニ B	びっばらんど	びっばらんシリーズ①	びっばらんシリーズ②
コンセプト	ほっとひと息、親子で過ごす時間になればとこれまで行ってきたびっばらん活動みなさんにもっと気軽に参加していただきたいとの想いを込めて、		子どもわくわく！ おとなゆったり... ～みんなであいっしょに音あそびりからだで感じて動かして～	いつもの遊びに ちょこっときらめきを！ ～「らしさ」を大切にしたい遊びを考える密な時間～	
始まりの会	・手遊び歌 「はじまるよ」	・お名前呼び 「どこでしょう」	・お名前呼び 「どこでしょう」 ・手遊び歌 「あたま・かた・ひざ・ぼん」 ・動物あてクイズ(動画)	・お名前呼び 「どこでしょう」 ・ふれあい遊び 「親子でペンギン・コアラになろう！」	・お名前呼び 「どこでしょう」 ・絵本読み ・ふれあい遊び 「げんこつ山のたぬきさん」
メイン活動	・絵本読み 「はるとなつはたけのごちそうなーんだ？」	・手遊び歌 「あたま・かた・ひざ・ぼん」 「おべんとうばこ」 「水中めがね」 「ピクニック」	・新聞遊び(前半) 「帽子・望遠鏡を作って、お山に行こう！」 (帽子作りは動画) ・動物たちの音遊び(後半) (オリジナル曲)	・描画遊び(アセスメント) ・汚れない感覚遊び (フィンガーペインティング)	・ちぎり絵 ・物語 ・着せ替え人形 ・色紙入りの風船遊び
終わりの会	・手遊び歌 「キャベツの中から」	—	・ババの作ったご馳走 「新聞紙の焼き芋・栗」 ・びっばらん手遊び	・絵本読み(動画) ・見せ合い ・写真撮影ごっこ 「ダンボール・カメラ」	・見せ合いごっこ ・びっばらん手遊び

らんミニB・C」のために申請した絵本はことごとく利用が不許可、または準備開始時点では未回答となった。このため、2回目は手遊び歌中心の内容へと変更を余儀なくされ、3回目については実施を断念することとなった。出版社の説明によるとネット上での著作権の不正利用の横行の急増に苦慮しているとのことであった。

#### ①「びっばらんミニA」絵本読み中心

1回目の「びっばらんミニA」を5月14日金曜日に実施した。作者と出版社の許可を得ることができ、「はるとなつ はたけのごちそう なーんだ？」（すずきもも、2017）を読み、その録画をオンデマンド・コンテンツとして許可条件に基づく期間に配信した。広報期間が短くなってしまったことから、家庭からの参加はなかったが、保育園の協力を得て4歳児の2クラス48名と複数の保育士が参加してくれた。

開始当初から園児達はスクリーンを興味深そうに見つめており、「○組さ〜ん」と学生が呼びかけると、一方向のテレビではないことが分かって歓声をあげ、学生の語りかけにやや興奮気味に答えていた。絵本読みが始まると真剣に見つめ、学生が絵本に登場する野菜について質問をすると、口々に答えていた。終わりの会で行った「キャベツの中から」という手遊び歌では、キャベツの中からニョキ、ニョキと出てくるアオムシの家族を指で現し、最後はチョウチョになる。このチョウチョがひらひらと舞う様子を表現した動きでは、立ち上がってチョウが飛び立つ様子を表現する園児もおり、画面を通じた交流で大いに盛り上がった。

#### ②「びっばらんミニB」手遊び中心

2回目の「びっばらんミニB」（5月28日金曜日）では、候補に挙げていた複数の絵本について、著作物の利用申請の許可が下りず、急遽手遊びのみで構成するプログラムへと変更することになった。手遊びを多用することには、3回生がかなり抵抗を示した。多くが前年度の「びっばらんど」を経験している学生ではあるが、コロナ禍の影響で未だ保育実習や幼稚園教育実習を経験しておらず、何の道具も必要としない手遊び歌を複数身につけていることが、子どもとのコミュニケーションや活動への誘導の手助けになることが実感できないようであった。

そこで、保育実習や幼稚園教育実習では、部分実習として手遊び歌のみを行ったり、活動の導入として行ったりすることも多く、学生にとって実習の準備に直結すること、十分親子に楽しんで頂けること、画面の向こうの親子や園児達との相互交流の有効な手段になり得ることを繰り返し伝え、ロールプレイ

ングなども行うことで、最終的には学生らも納得し、「みんなでピクニックに行こう」をテーマに複数の手遊び歌を用いて展開することができた。

保育園の3歳児2クラス48名と保育士、2つの家庭から1歳代の子どもと母親が参加してくださった。全身を使って動く「あたま・かた・ひざ・ぼん」からスタートして参加者達と共に動き、お弁当を作ってピクニックに出発した後は、「水中めがね」を使って池の中の生き物を探し当て、「ピクニック」でさらにご馳走を食べる流れで、全身を使う粗大運動から、手で焼きそばを食べるフォークを表現したり2本の指で爪楊枝をつまんでたこ焼きに刺したりする微細運動へと展開していく手遊び歌のプログラムである。

結果的には1回目の「びっばらんミニA」での絵本読みを中心としたプログラムよりも、2回目の手遊び歌を中心とした内容の方が、より参加者と相互に交流することができ、さらに、園児達と家庭から参加の親子双方がお互いを意識し合う光景が認められ、オンライン双方向交流型ならではのプログラムとなった。

これら2回の「びっばらんミニ」で、家庭の親子だけでなく保育園児と関わる経験をしたことは、3回生にとってもまたとない経験となったようである。その後の実習では手遊び歌を沢山活用したと報告があった。また、2回生も次は自分たちの番だと意欲が高まってきたように見受けられた。

次いで、3回生が初めての幼稚園教育実習に臨んでいる間に、2回生による「びっばらんミニC」を実施する予定であったが、早めに申請した著作物利用がことごとく不許可となったため実施を断念し、この後に続く「びっばらんど」の準備へと移行した。

#### (2)「びっばらんど」

「びっばらんど」（9月25日土曜日）の準備は難航したが、これについては別稿で検討する。

「びっばらんど」のコンセプトは、「子ども わくわく！おとな ゆったり... ~みんなでいっしょに音あそび♪からだで感じて動かして~」とした（図20）。

始まりの会では、事前に録画した動画によって、シルエットを見て考える「動物あてクイズ」を行ってから、双方向交流に切り替えて手遊び歌「あたま・かた・ひざ・ぼん」で全身を動かした。

次に、「びっばらん」キャラクターである「びっばくん」・「らんちゃん」が登場し、新聞紙で帽子を作って被った後に、伸び縮みする新聞紙の望遠鏡で先に行った動物たちを探しながら山を登っていく。山では、動物あてクイズで登場したウサギやタヌキなどが次々と現れてオリジナル曲に併せて「びっば



図20 「ぴっぱらんど」のチラシ



図22 事前へ送付した材料一式

くん・「らんちゃん」と一緒にかくれんぼうをしたり踊ったりして遊ぶ。

終わりの会では、お腹が空いてきた「ぴっぱくん」と「らんちゃん」の二人がお家に帰ると、パパが美味しそうなお芋や栗を焼いて、ママと一緒に出迎えてくれる。最後は「ぴっぱらん手遊び歌」で締めくくった。

(3) 「ぴっぱらんシリーズ」

「いつもの遊びにちょこっときらめきを！～「らしさ」を大切に遊びを考える密な時間～」をコンセプトに、2020年度には取って行わなかった感触遊びを汚れない形で実施した（図21）。例年であれば「ぴっぱらんシリーズ」は4回連続で毎週に行っているが、幼稚園教育実習、保育実習がずれ込んだため、2週間の間をおいて2回のみプログラムとした（10月3日・11月27日土曜日）。

プログラム開始前に子どものお気に入り（車、クマ、恐竜、ウサギなど）を尋ねて、お気に入りの型紙を作り、材料やお手紙を事前へ送付することで、親子と学生らの交流を始めた（図22・図23）。

また、材料を事前へ送ることで、家庭でも感触遊びを楽しめるように考慮した。汚れない感触遊びの



図23 お気に入りの型紙

方法として、チャック付きのビニール袋に絵の具を入れて伸ばすことを取り入れた。1回目の録画分析に時間を掛けることで2回目には同じ材料でも家庭にあったオーダーメイドの遊びを提供することができた。描画遊びを通してそれぞれの子どもと家庭のアセスメントを行うこともできた。学生たちは基本の材料やメニューを基に、筆者らが驚くほど工夫を凝らした内容を展開し、回数は少なくとも非常に充実したプログラムとなった。

4. 結果

表2に2017年度から2021年度のぴっぱらん活動における参加者の内訳を延べ人数で示す。参加家族の固定を前提としている「ぴっぱらんシリーズ」であっても、幼い子どもは体調を崩すことが多くあり一部家族の入れ替わりがあるので延べ人数で表記し



図21 「ぴっぱらんシリーズ」のチラシ

表2 ぴっぱらん活動における参加者の内訳

	年度	回数	家族	子ども	母	父	祖父	祖母	園児	保育者
ぴっぱらんシリーズ	2017	3	18	18	18	0	0	0	0	0
	2018	4	19	19	19	0	0	0	0	0
	2019	4	28	28	28	0	0	0	0	0
	2020	4	20	42	20	0	0	0	0	0
	2021	2	15	25	15	9	2	2	0	0
ぴっぱらんど	2018	5	47	85	47	28	参加有り	参加有り	0	0
	2019	3	80	112	54	34	参加有り	参加有り	0	0
	2020	2	16	20	15	1	0	0	0	0
	2021	1	7	9	7	4	0	0	0	0
ぴっぱらんミニ	2021	2	2	2	2	0	0	0	96	6

ている。2017-2019年度は来室・対面型での実施、2020-2021年度はオンライン双方向交流型による実施である。

「びっばらんど」については、オンライン双方向型の参加者は極端に少なくなっているが、編集した2020年度のオンデマンド・コンテンツについては、限定公開ながら約470回の視聴がある（2022年2月時点）。

2021年度の「びっばらんシリーズ」では、これまでに無い父親の参加に加えて祖父母の参加があった。そのうちの1組は、遠方に住む乳幼児期の親子と祖父母がオンライン上で再会する機会となった。また、2021年度に初めて行った「びっばらんミニ」では、保育園児と家庭の親子が共に参加した。

表3にオンライン双方向型・オンデマンド型と従来の来室対面型による「びっばらんシリーズ」と「びっばらんど」の特徴について記す。オンラインによって対象となる親子が広がったことが明らかになっている。

表3 双方向型・オンデマンド型と来室対面型

活動	オンライン:双方向型・オンデマンド型		従来の来室対面型	
	びっばらんシリーズ	びっばらんど	びっばらんシリーズ	びっばらんど
対象	字幕が必要な親子 英語が必要な親子 乳幼児期の親子 兄弟姉妹 居住地域に限定されない		日本語が話せる親子 幼児1人と養育者のみ 近隣在住	
関わり	ブレイクアールームで 親子毎に個別対応 日英の字幕付き 英語対応	複数の親子に 一斉に対応 字幕付き	親子分離 子どもはマンツーマン	複数の親子に 一斉に対応
内容	個別対応の 親子遊び	合同親子遊び	感触遊びを中心とした 発達促進的アプローチ 養育者向けプログラム	合同親子遊び
配信	双方向型	双方向型 オンデマンド型	なし	なし

(瀬々倉,2020)

## 5. 考察

コロナ禍におけるオンラインによるびっばらん活動を振り返り、従来の来室・対面型による活動と比較検討を行った。びっばらん活動のなかでも個別対応の「びっばらんシリーズ」では、特にオンラインによる利点があることが明らかとなった。以下に利点を挙げる。

〈参加者にとっての利点〉

- ①多様な家族に対応した遊びを享受できる。
- ②人目を気にせず遊ぶことができる。
- ③家族毎の参加、きょうだいや父親、祖父母も参加し易い。
- ④遠方に住む家族の再会の場になる。
- ⑤オンデマンド・コンテンツの視聴が可能。

〈保育学生にとっての利点〉

- ①通常の保育実習・幼稚園教育実習では経験することが難しい保護者との関わりや親子を1セットとしての関わりの機会が得られる。
- ②普段知り得ない家庭の中での子どもの様子の一端

や家族間の関わりを知る機会となる。

- ③動画記録を基にしたアセスメントや分析を通じて学生同士がディスカッションしたり、教員らの指導を受けたりすることができる。
- ④次回にどのような関わりや遊びを提供するかを③の分析や指導を基に考えることができる。

一方、欠点としては以下のことをあげることができる。

〈参加者にとっての欠点〉

- ①親子分離を行うことができない。
- ②思い切り汚れる遊びを行うことができない。
- ③他の家族との交流がしにくい。

〈保育学生にとっての欠点〉

- ①子どもに直接手を携えて遊ぶことができない。
- ②ブレイクアウト・セッションでは1人で親子に対応しなければならない。

上述した利点と欠点とは表裏一体の面もあり、今後さらに参加者のニーズなども含めて検討する必要がある。

また、びっばらん活動はコロナ禍前には当然のこととして来室・対面型での実施であったが、コロナ禍によってオンラインを駆使した活動を余儀なくされたことで、来室・対面型では難しいオンラインならではの長所も明らかになってきている。今後、単なる両者の使い分けではなく、同じプログラムに対して来室・対面型とオンラインとを融合させたハイブリッド型プログラムへと進化させる必要がある。

## 文献

- 瀬々倉玉奈編著（2021）京都女子大学親子支援ひろばびっばらん Photo Book, 京都女子大学親子支援ひろばびっばらん, 全24頁
- 瀬々倉玉奈・清水文（2021）保育学生の子ども・子育て支援の学びと ICT—オンラインびっばらん活動のプロセス—, 京都女子大学教職支援センター研究紀要第3号, Pp. 121-134
- 瀬々倉玉奈（2018）保育者養成におけるコミュニケーション・ワークの導入, 「発達教育学部紀要」第14号, 京都女子大学, Pp. 143-152
- すずきもも（2017）はるとなつ はたけのごちそうな—んだ?, アリス館

## 謝辞／付記

びっばらん活動にご参加下さった乳幼児期の親子様、華表保育園の皆様、関連機関の皆様にご心から感謝申し上げます。びっばらん活動は、乳幼児保育・教育及び心理学的なアプローチによる子ども・子育て支援を実践し、並行して保育学生を支援者として養成していることが評価され、令和2年度京都はぐくみ憲章実践推進者表彰・大賞、令和3年度「子供と家族・若者応援団表彰」において、内閣府特命担当大臣表彰を受賞しています。